

## 出自を伝えた上で、新しい家族を構築していくこと

認定NPO法人 病気の子ども支援ネット 遊びのボランティア  
理事長 坂上 和子 (保育士・社会福祉士)

ゆきさん、私のことを「児童養護施設で育った方」とみなさんに紹介してくださってありがとうございました。

人は出自を選べません。

家庭に恵まれなかった子どもをどうやって社会が支えるか？

今回はそんなテーマでした。

孤児院を日本で最初に創設した石井十次の時代は、1200人の孤児らが共にくらす、大舎制が中心でした。

今、対象児童が4万6000人という数を見ながら、小舎制や里親、養子縁組など、あらゆる手段で不幸な子どもたちに手を差し伸べようとしていることが、藤井康弘さんの資料(たいへん素晴らしい資料!)でよくわかりました。

親に恵まれない子どものしあわせのために、社会的養護が、さまざまな形で不十分ながらも整っていることを改めて確認したことです。

私は10代のほとんどを、児童養護施設で過ごしました。

児童養護施設は大舎ですが、振り返ってみて、家庭では身につかない、大所帯の利点もありました。

同じ境遇の子どもが存在が何より励ましになったし、

子どもたちに、体当たりで、自分の人生をかけて寄り添ってくれた大人に出会えたことをしあわせに思っています。

当時、どの学年も1ダースほどの子どもたちが一緒に暮らしていましたが、それぞれ訳ありの子どもたち。

「あんた、いいわね。親に名まえつけてもらったんでしょ、私自分の名まえが大嫌い」という子がいました。

たとえば、仮に宮崎竜子さん、宮崎県で拾われて、たつ年生まれだったから。

親に名前を付けてもらえたこと、そういうの、幸せっていいのか？

我が家はアルチュウのおやじ、「早く死んでくれ」って子どもながらに思っていたので、不幸の中にも幸福あり、と気づいたのもこの頃でした。

親は刑務所、体中タバコを押し付けられたまだらもよりの被虐待児、こうした子どもたちに必要なのは教育です。

子どもたちと寝食ともにしてくださったのはカトリックのシスターたちでしたが、聖書の教えは「貧しい者は幸いである」、「悲しむ者は幸いである」、というおよそこれまでと違った価値観を知ったこと。

朝はミサ（ラテン語のお祈り）から始まり、演劇、運動部、器楽室にはマリンバやビブラフォン、あらゆる楽器がそろい、コーラス指導はNHK児童合唱団の指揮者がくる本格的なものでした。編み物も伝承され、バザーでは手編みのレース編みが提供され、幼稚園児を高校生がみたり、自然にコミュニケーションスキルを学んでいたと思います。入所時、5年生で割り算も十分にできなかった私が勉強を面白いと感じたのも、本好きになったのも、先輩やシスターのおかげでした。

夏休みは大自然の中に放り込まれました。幼稚園から高校生まで山中湖畔にある林間学校に移動し、そこで40日を過ごしました。山歩き、水泳、夜はグラウンドに寝て星座をさがしたり、イタリア人のシスターや神父がいらしたので、フォームダンスを踊ったり、陽気な思い出がたくさんあります。

慰問では、私のいた当時はアランドロンとか、柳家金語楼（今の人、知りませんよね）いろんな人が来ました。その後、マイケルジャクソンが来たそう。バレンタインでは、卓球2台分の大きさの厚い板チョコがとどいて、トンカチで割って分けたこと、とんかつ屋の老舗がやってきて、子どもと職員分（大人も入れて300人いましたが）いただきました。そのときの板前さんのキャベツの千切りの早技に感心したのを覚えています。もちろん、いじめや不自由さはあり、よい思いでだけではないけれど・・・

いま、思えば、血縁を超えたこのような支え合いが私を強めてくれました。出自を選べないこどもには、大舎、小舎にかかわらず、「大切にされた思い」、これが重要です。それは口でいうほど、簡単ではないけれど。

そういう意味で特別養子縁組で、マッチョさん、菅俣ファミリーに出会えた子どもたちは幸せです。写真の1枚、1枚に愛情があふれていました。医療事故で亡くなったお嬢さんは、特別な使命をもって、マッチョさんのところに生まれてきてくださいました。マッチョさんは、「おなかの違うママから生まれてきた子ども」という表現で、真実を伝えていますが、出自を伝えた上で、新しい家族を構築していく、簡単なことではないかもしれませんがその家族は祝福がたくさんあると感じています。この日、帰りは温かい気持ちでいっぱいでした。